創業85周年記念企画

3世代が繋ぐ、背広の浪漫
ツキムラ物語 PART 5

奈良の町で、親から子へと繋いでいった「洋服店」。そのタスキを受け取った現社長　岸伸彦氏の記憶と共にツキムラの軌跡、そしてこれからをご紹介していくコーナーです。

PRODUCED BY TUKIMURA

ツキムラの歩み

		時代背景
2000年	企画室と事務機能統括本部を東生駒に設置	シドニーオリンピック開催
	テクス工場の村上さんと出会う	プレイステーション2が発売
	ミラノでみた憧れの車 ローバーのディフェンダーをイギリスから取り寄せる	木村拓哉が結婚
2001年	ミラノ食堂にて4社合同企画「ファッションショー」開催	大阪にユニバーサル・スタジオ・ジャパンがオープン
	近鉄電車で車内吊り広告をスタート	小泉純一郎 首相内閣が始まる
	JCBとの提携ハウスカード「ラガゾットJCBカード」発行スタート	皇太子妃雅子様が愛子様を出産

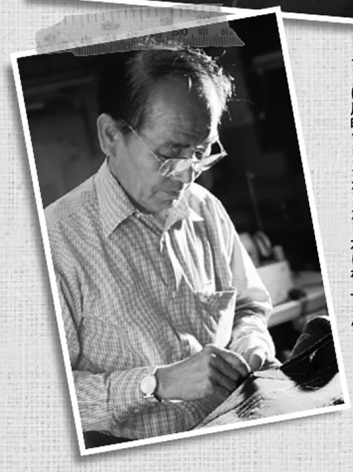
前回までのあらすじ

大正14（1925）年、奈良町の一角で創業された「ツキムラ洋服店」。その3代目として生まれた岸氏。20代で店を担い、貿易や縫製を勉強しながら、株式会社ラガゾットを設立。3店舗目となる学園前出店で、販路を拡大。手仕事の温もりと効率的な生産の仕組みを融合させたスーツ作りを目指す。

1945年頃 先代社長

人生を彩る一着を仕立て上げる最高の職人との出会い

スーツを合理化や量産化で作ることが、当り前の時代になっていた。しかし、人生の節目、大切な時間を共にする背広には、こめられた想いや緊張感が人によって違う。それなのに、同じものを作ることに、岸氏は抵抗を感じ始めていた。創業者である祖父が、全てを手縫いで仕立て上げていたように、背広作りの原点に戻りたい。「お客様の人生を彩る、最高の一着を」。それが叶えられるなら、作業効率が落ちても、アナログと言われてもいい。工場の生産とは別に、ツキムラの心臓部を担う、最高の背広を仕立てる職人を探さなくては・・・。



岸氏は村上氏に「裁断は必ず手で行って欲しい」とお願いしている。人の手で行うことによって生地に想いを込め、お客様の要望もはさみを持つ手首の角度を変えるだけで、すぐに反映できるからだ。左は村上さん。

大阪の鶴見に、かねてから業界では腕の知られた職人がいた。長年、最も高い技術が要求される礼服を作り続けていた村上清一さんだ。3人の職人がほぼ手縫いで仕立てているその工場では、1日20着しか作れない。平面の布を立体的に仕上げる技術は、まるで布に生命を吹き込むようにみえた。「この人しかいない」と確信した岸氏は、足繁く工場へと通い、自社製品の縫製をお願いした。だが、相手はなかなか首を縦に振ってはくれない。ならば、と話題を変えてみた。商売の話しはせず、熱く語ったのは、数々の失敗談、そこから学んだ背広の理念、これからの夢。いくばくかの月日がたった後、村上さんは口を開いた。「わかりました。あなたの想いを伝える工場に、うちがなりましょう」。それも、中途半端に1着、2着を引き受けるのではなく、ツキムラの専属工場になってもいいとさえ言う。それから二人は、背広談義を闘わせ始めた。「お客さんにとって一番興味のあるオーダーメイドとは」「ネームに座右の銘をいれてみては」「裏地や襟のカラークロスの色を選べるようにしようか」。背広を作るルールや規約があるならば、それらを守りながら新しいオーダーメイドを広めて、職人技の魅力を感じてもらいたい。新しいチャレンジに胸が躍り、アイデアは尽きなかった。

「いつか車が空を飛ぶ」。村上職人と話しながら、岸氏は幼い頃、父親とそんな夢みたいなことを言って、笑いあったことを思い出していた。"現実"を生きることばかりの日々に、父親と話しているような、肩の力が抜けた温かい時間が村上さんとの間に流れていた。「胸ポケットの裏地を引っ張り出すとポケットチーフになる」「一つだけボタンホールの色を変える」。常識では考えられないユニークな発想に、頑なに形を守り続けていた職人が歩み寄ってくれた。この時のアイデアこそが、ツキムラの原点となった。村上さんは70才の今でも現役。岸氏が父のように慕うかけがえのないご意見番だ。

オンリーワンにこだわったこのスーツを、もっと多くの人にのスーツを見て欲しい。そんな想いが高まった丁度その頃、ファッションショーをしないかという話が持ち上がった。雑誌『ぱーぷる』、美容室、レストランと、異業種のコラボレーションで実現したファッションショーは、店の外まで人が溢れるほどの大成功。仲間との達成感に、興奮は夜更けまで冷めやらなかった。

物作りに没頭する無邪気な時間、ファッションショーでやり遂げた仲間との達成感。岸氏に「ラガゾット（青二才）」の社名にふさわしい"若造の心"が岸氏に戻ってきたのだった。

（次号へ続く・・・）